

療養場所の違いに応じた認知症者のエンドオブライフケア充実に向けての調査研究
－COVID-19 流行の影響も踏まえて－

研究分担者 大河内二郎 介護老人保健施設 竜間之郷 施設長

研究要旨

老人保健施設は施設サービスだけではなく通所リハビリや訪問リハビリ等のサービスを提供していることから、在宅の、より軽度な障害を負った時点から今後の生活を支えている。つまり老健施設では、単なる終末期の看取りだけではなく、対象者が元気なうちから残りの人生をどこで、どのように生きるのかということも含めて支援が可能な側面がある。従って単なる終末期医療“End of Life care”ではなく、“Life Care”と考えることにより、よりそれぞれの利用者の個別性に立ったマネジメントが可能である。また COVID19 等流行期における EOL ケアについて考察した。今後はこれまでの成果を全国老人保健施設協会等における研修等に生かしていきたい。

A. 研究目的

老人保健施設における看取り、EOLケアについて、記入式調査を行うとともに、これまで老人保健施設で行われた看取りに関する調査研究事業を収集し、今後の老人保健施設での看取りケアの充実。改善に役立てる。特にCOVID19流行時に利用者・家族のコミュニケーションが困難になったことも想定したEOLケアについて考察した。

B. 研究方法

1. 認知症者に対する意思決定支援および緩和ケアに関する調査のため記入式調査を郵送にて行った。
2. 老人保健施設における看取り、EOLケアについて、これまで行われた研究事業を再度検討した。
3. COVID19等により利用者・家族とのコミュニケーションが困難な場合の対応等について検討した。

（倫理面への配慮）

施設における調査は匿名で行われた。

C. 研究結果

施設における調査では170の老健施設から回答があった。詳細は別途報告されている。このほか COVID19 による影響等について考察した。

D. 考察

老健施設は入所しつづける施設ではなく、居宅での生活を維持しつつ、リハビリ等の目的で施設利用をする高齢者に対して総合的なサービスを多職種で行っているという特徴がある。その中で、老健施設を繰り返し利用している中で、最後に老健施設での看取りを行うことになる高齢者が増えている。2017年には約7割の老健施設が看取り機能を有していた。老健施設における看取りの満足度調査では約9割の利用者の家族が看取り後に満足と答えており、その施設側要因としては、多職種での利用者への説明と、より早期の看取りへの説明等が要因として挙げられた。

また老健施設では、単なる終末期の看取りだけではなく、対象者が元気なうちから残りの人生をどこで、どのように生きるのかということも含めて支援が可能な側面がある。従って単なる終末期医療“End of Life care”ではなく、“Life Care”と考えることができる。

さらにCOVID19等の流行期において本人・家族のコミュニケーションが困難になった場合についても考察した。

E. 結論

介護老人保健施設における終末期医療についてデータ収集を行うとともに、COVID19流行期におけるEOLケアについて考察した。

F. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 大河内二郎 東憲太郎 介護老人保健施設における余命が限られた方々へのサービス提供
医療と社会 Vol.33 №1 2023 in press

G. 知的財産権の出願・登録状況

なし